

町田を わぎる！

町田市景観づくり市民サポーター 考え続けるグループ

町田をわぎる！

目次

まえがき…「なぜわぎり？」	p03
わぎりルート 一覧	p04
わぎりページの見方	p05
わぎり1<相原ー七国峠ー八王子みなみ野>	p06
わぎり2<橋本ー小山ー鑓水>	p08
わぎり3<淵野辺ー小山田ー唐木田>	p10
わぎり4<古淵ー山崎ー小野路>	p12
わぎり5<町田ー金井ー新百合ヶ丘>	p16
わぎり6<町田ーかしのき山ー恩田>	p20
わぎり7<つきみ野ーつくし野ー長津田>	p22
トピックス×4題	p26
まとめ…「台地と丘陵地の境の風景」	p30
あとがき…「わぎり から せんぎり へ」	p32

まちなかの中景



広袴と能ヶ谷の境を流れる真光寺川
川沿いの小公園が周囲の水田とひとまとまりのように見え
川と背景の丘の森に挟まれて小さな世界をつくっている



金井町の七面社脇の急坂から東の方向を見る
眼下の児童公園から谷戸底の鶴川街道を挟んで金井八幡の森
さらにその向こうに玉川学園外周の尾根筋と
幾層もの景色が重なった、町田ならではの濃密な中景

まえがき なぜわぎり？

町田は八王子市・多摩市・川崎市・相模原市・大和市・横浜市などの行政区域に接しており、古くから交通・商業・文化の交差点で、その形状は東西に細長く「多摩にはばたく丘陵都市」と言われています。

また、北部丘陵を代表とする緑の尾根筋が成瀬地域まで繋がるとともに、境川などを境界として西端の相原から東端のつくし野に至る各地域は、尾根と谷戸に挟まれた複雑な地形の上に街がつくられています。

そのため、町田市景観計画で言うところの「丘陵地ゾーン」「住まい共生ゾーン」「にぎわいゾーン」をそれぞれ個別に歩くことや、町田の景観的に優れた場所などの調査だけでは、町田の地域ごとの景観的特徴を捉えることは難しいと考えました。

私たちは、町田の景観的特徴をどのように拾い出し、全体像をつかむことができるか議論を重ねてきました。そして、町田の尾根筋を境にして輪切るように歩き、高低差を感じながら他地域と比較して歩けば、それぞれの地域の特徴を拾い出すことができると考え、「わぎり」と名付け調査することにしました。

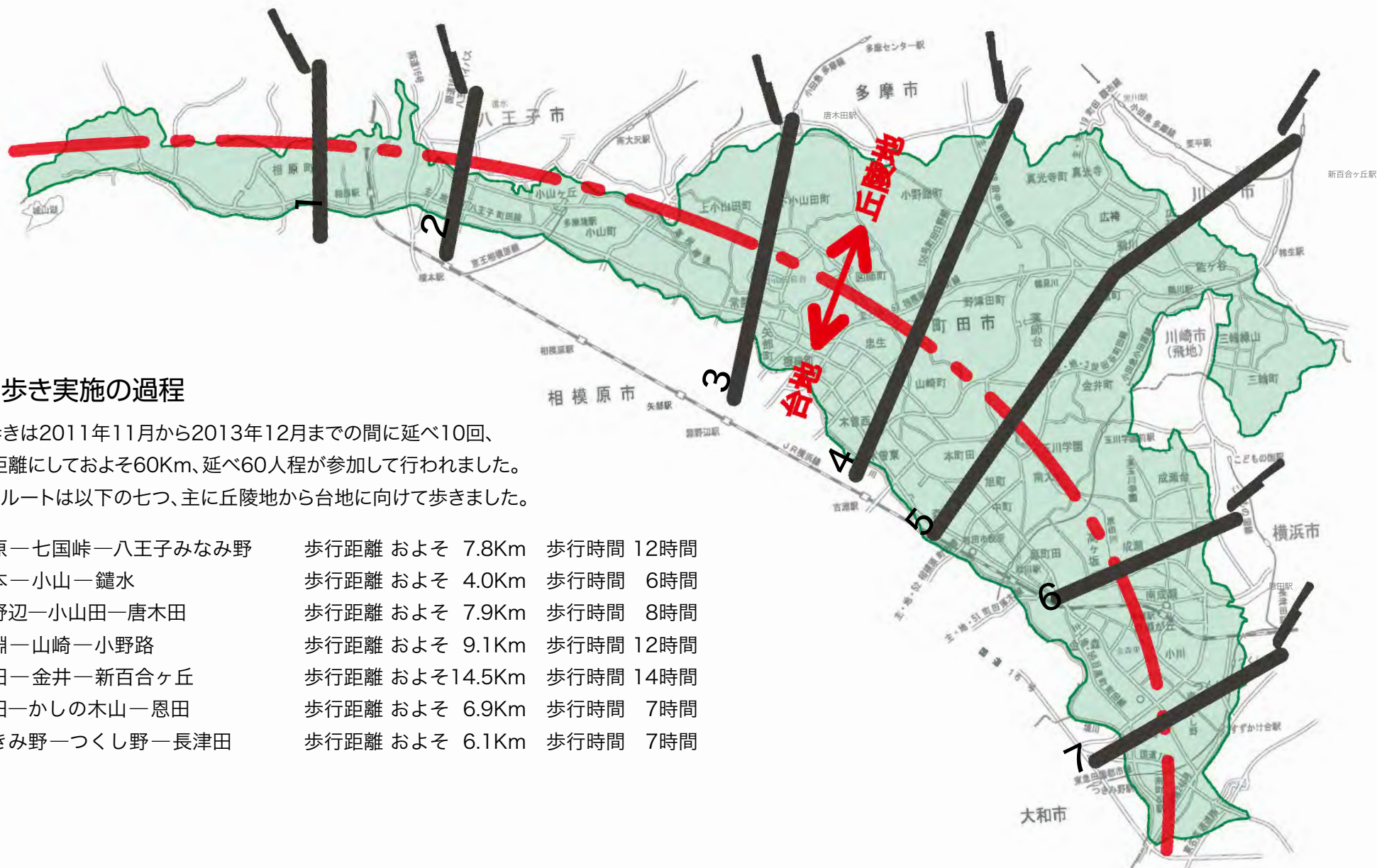
わぎりのルートは相原からつくし野までの七つを候補に挙げ、グループで検討し決めていきました。また、わぎりを行うために各地域の客観的な資料の収集を行い、

「その地域を挟む尾根と谷戸を歩き比較する」「町田に隣接する他の行政区域も歩く」「その地域に古道がある場合は、必ずルートに入れる」「使用する地図は、現代版と明治版を使用し、比較しやすいようにする」などのルールを決めました。

このような方法で三年かけて歩いた成果をまとめたものがこの冊子です。冊子には、各ルートにおける地形的な変化や、その場所における景観の持つ意味、実際に歩いたときに気づいたこと、感動した風景などがちりばめられています。

ページをめくり、わぎり歩きの醍醐味を感じながら、町田の今後の景観づくりを考えるきっかけにしていいただければ幸いです。

わぎりルート 一覧



わぎり歩き実施の過程

わぎり歩きは2011年11月から2013年12月までの間に延べ10回、
 総歩行距離にしておよそ60Km、延べ60人程が参加して行われました。
 わぎったルートは以下の七つ、主に丘陵地から台地に向けて歩きました。

1・相原一七国峠一八王子みなみ野	歩行距離 およそ 7.8Km	歩行時間 12時間
2・橋本一小山一鎌水	歩行距離 およそ 4.0Km	歩行時間 6時間
3・淵野辺一小山田一唐木田	歩行距離 およそ 7.9Km	歩行時間 8時間
4・古淵一山崎一小野路	歩行距離 およそ 9.1Km	歩行時間 12時間
5・町田一金井一新百合ヶ丘	歩行距離 およそ14.5Km	歩行時間 14時間
6・町田一かしの木山一恩田	歩行距離 およそ 6.9Km	歩行時間 7時間
7・つきみ野一つくし野一長津田	歩行距離 およそ 6.1Km	歩行時間 7時間

わがりページの見方

七つのルートは原則、見開きの中で説明されています。距離が長く次の見開きまで続く場合は、断面図が紙面端で切れています。

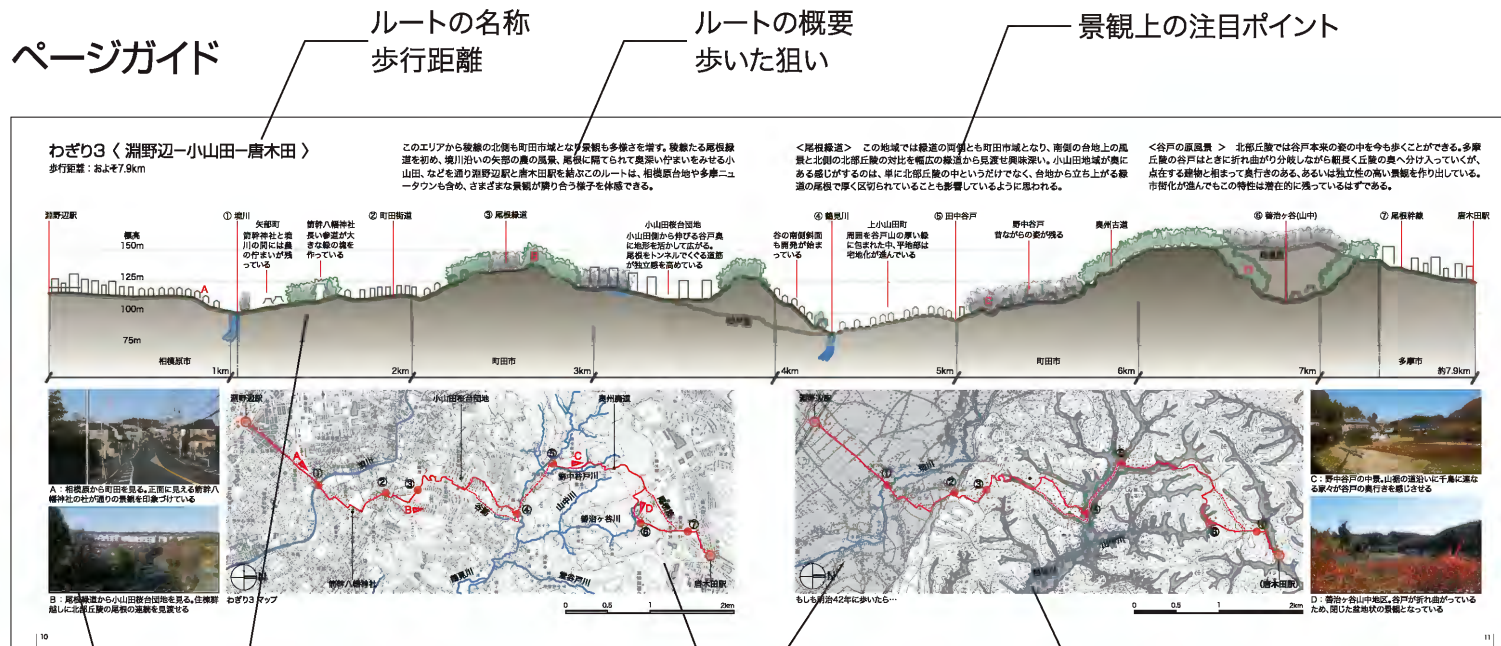
わがりマップ

- ・現在と過去（明治42年当時）2枚の地図上で示しました。実際もふたつの地図を手に見比べながら歩いています。縮尺はどちらも1/30000です。
- ・わがる方向と明らかに直交する向きに歩いた範囲は点線で表示しています。断面図上でも点線にしています。

わがり断面図

- ・道中の高低差が表現されています。歩いた道なりですので、丘や谷の断面形状を正確に示すものではありません。
- ・高低差が分かりやすいよう、歩いた実感も勘案して、高さを距離に対して7倍強調しました。縮尺では距離が1/14000、高さが1/2000となっています。
- ・標高を25mごとに点線で示しました。図面下辺の標高はルートごとに異なりますが、総じて西寄りのものほど標高が高くなっています。
- ・集合住宅、戸建住宅、屋敷、緑、寺社、河川などが描かれていますが、あくまで記号として道中の街並のイメージを表現したものです。従って、これらの大きさ、位置、棟数などは実際の街の姿を正確には示していないこと、あらかじめご了承ください。

ページガイド



凡例

わがりマップ・わがり断面図の記号

- A**▶ 写真撮影方向(マップ)
- A** 写真撮影位置(断面図)
- 集合住宅・事務所ビル等
- 戸建住宅
- 屋敷
- 寺社
- 緑地
- 河川
- 調整池等
- 背景の緑地
- 暗渠化された河川
- わがりと直交した区間

わがり断面図
道中の高低差などが実感できる

特に気になった景観を写真で説明

わがりマップ

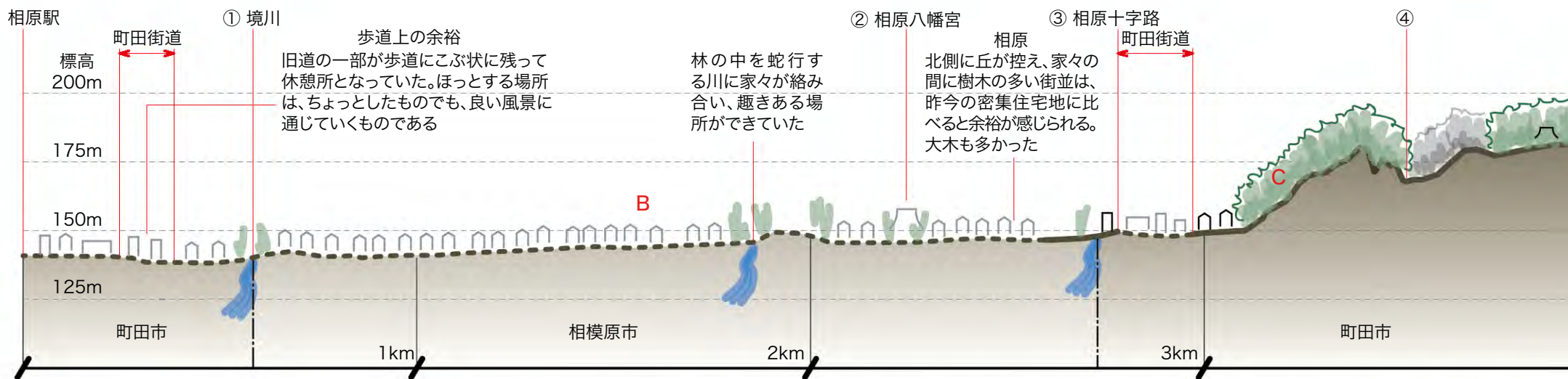
現在に加え明治時代の地図にも経路を表示
今と昔の違いを比べると楽しい

谷戸などの低地や平地を灰色で表示

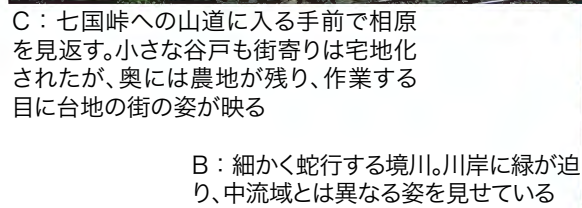
わぎり1 〈相原—七国峠—八王子みなみ野〉

歩行距離：およそ7.8km

七国峠を越える道筋は多摩丘陵の南側の稜線が昔ながらの姿を残しており、尾根越しに台地と丘陵を行き来する道程の本来の姿を今でも実感できるルート。町田をわぎっていく上でも比較のベースとなる体験となった。また、境川が蛇行した流れを残しており、川沿いの景観にも他の地域と違った姿が見出せる。

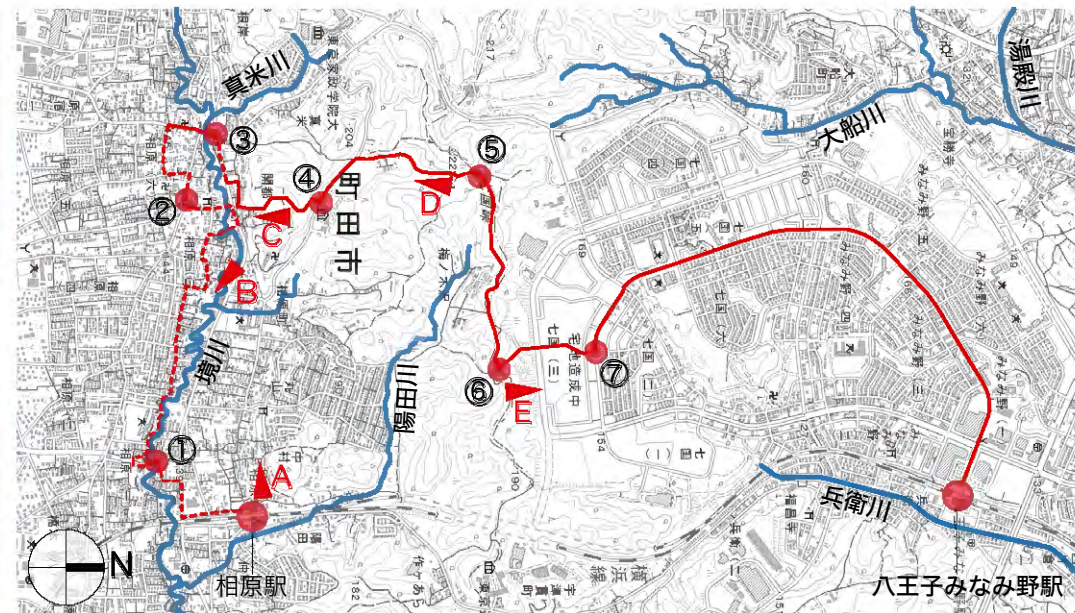


A：相原駅前の小山を上ると風情のあるこじんまりとした一画に出る。樹木をくぐると住宅地への近道が続く



C：七国峠への山道に入る手前で相原を見返す。小さな谷戸も街寄りには宅地化されたが、奥には農地が残り、作業する目に台地の街の姿が映る

B：細かく蛇行する境川。川岸に緑が迫り、中流域とは異なる姿を見せている

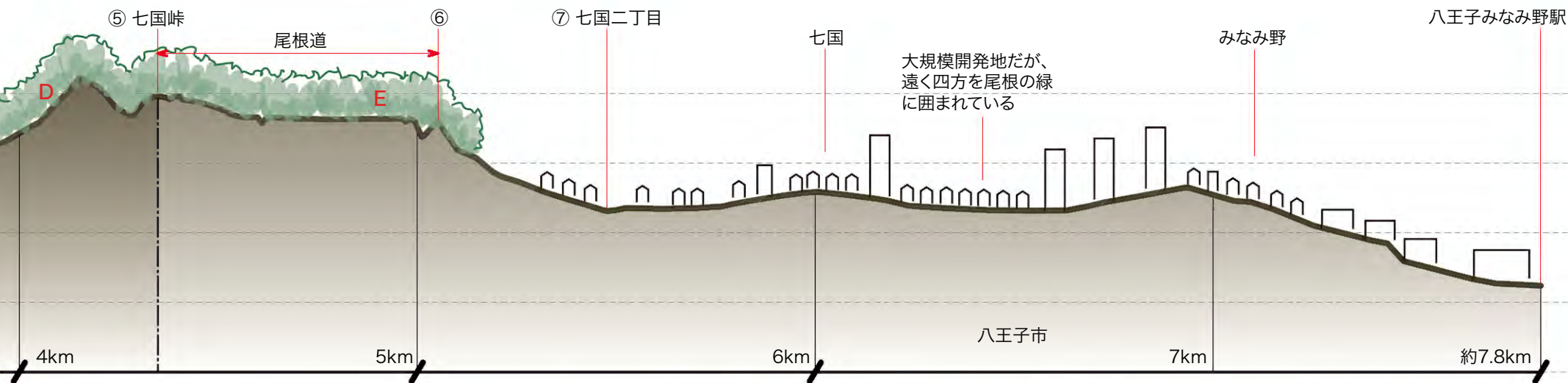


わぎり1 マップ



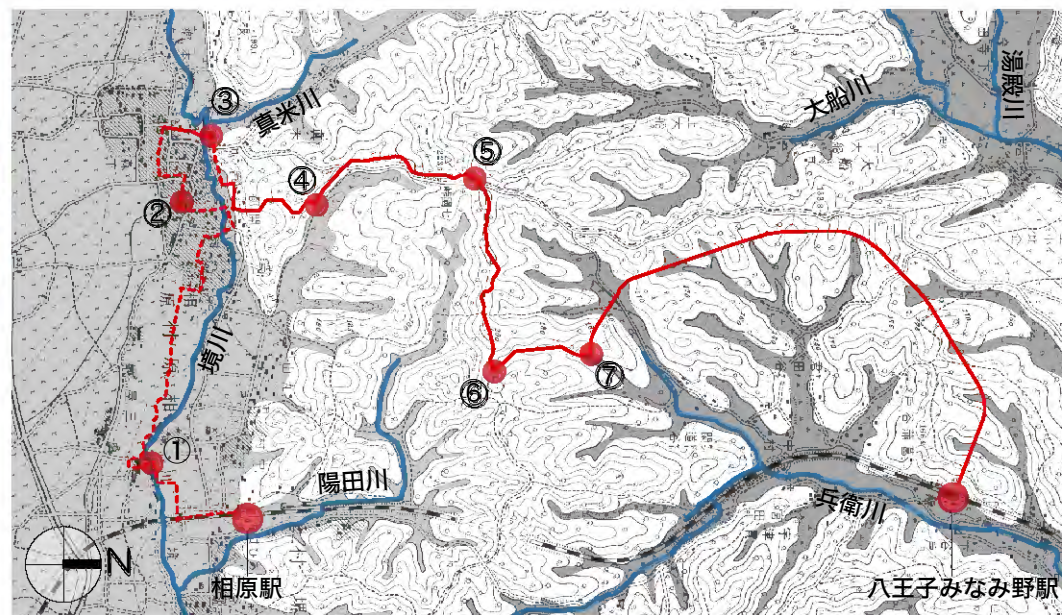
<尾根越えの原体験> 七国峠に向かって八王子側から登る。尾根道から遠くに八王子の宅地が垣間見え、緑のトンネルの中を抜け下った先に相原の街並が開けてくる。峠の緑は町田と八王子の分水嶺で、昔から人々は難儀しながら峠を行き来したに違いないが、この風景をどのように眺めたのだろうか。

<蛇行する境川> 中流以降整備されて開放的な場となっている境川も、このあたりはまだ緩く、激しく蛇行しながら流れている。川岸には木立が繁り、大きく蛇行する場所では鬱蒼とした中に落ち着いた空間が生まれていた。川の流れがその周辺を含めて街中でつくる、もうひとつの景観を見ることができる。



E：七国峠の尾根道から見た八王子側の風景。戸建て住宅の波の中に森やマンションが浮かんでいる

D：七国峠の山道。半円状の道に樹木が覆いかぶさり、トンネルの中を行き来するかのよう感じられる

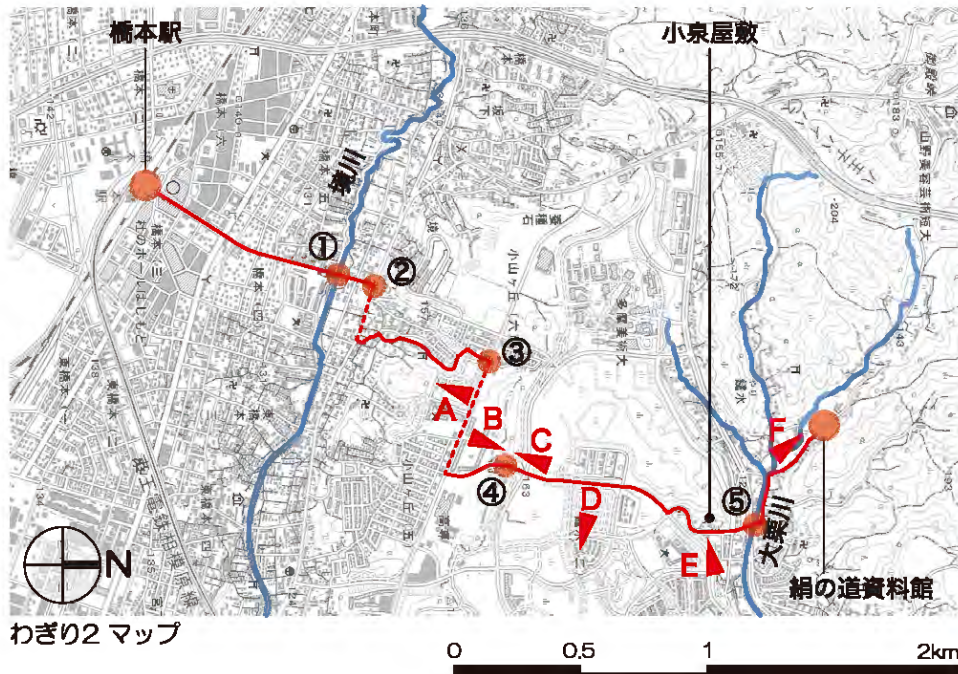
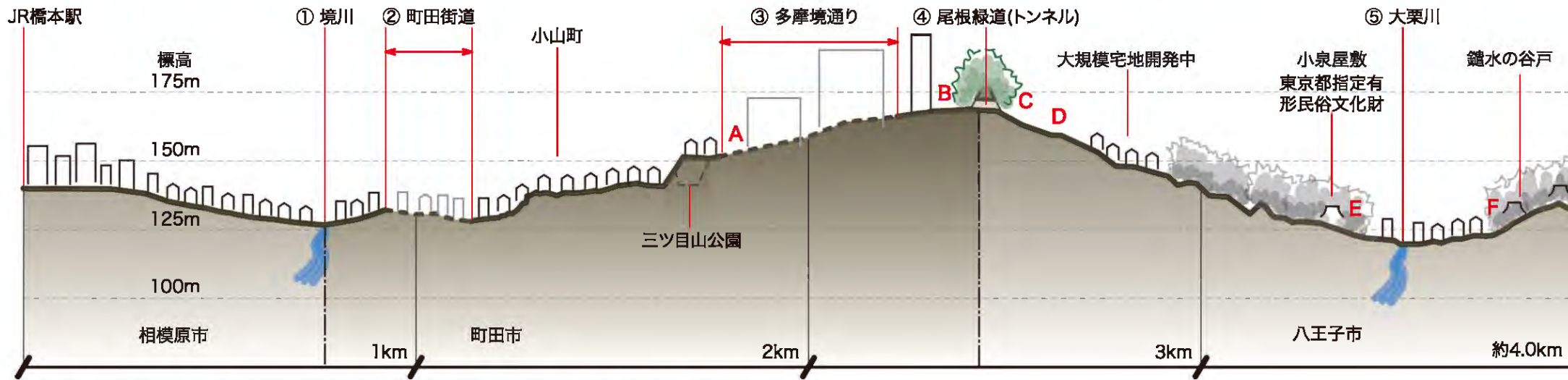


もしも明治42年に歩いたら…

わぎり2 〈橋本-小山-鎌水〉

歩行距離：およそ4.0km

台地の橋本と丘陵内の鎌水を結ぶルートは、多摩丘陵の南側の尾根を越える点では七国峠越えと同じだが、八王子側の大規模造成を伴う宅地開発、町田側の多摩境通りの開発に遭い、歩いた印象は全く異なったものとなっている。鎌水の北側は谷戸の風情が残っており、新旧の景観を対比的に見ることもできる。



A：三ツ目山公園を多摩境通りから見る。谷戸最奥部をダム状に区切った調整池兼公園と、それを囲む小学校、鎮守の森、谷戸底の住宅地、さらには橋本の高層ビルや丹沢までを一望できる不思議な景観



D：八王子側の大規模開発地の風景。町田と接する高地を高層住棟、大栗川に向かう北斜面を戸建て住宅が埋める

<整然と雑然> 尾根緑道を挟んで、八王子側は大規模に宅地開発されて人工的な整然さを持つ街並に変貌しつつある一方、町田側は小さな開発が地形なりに幾つも重なった風景となっており、このルートではその対比をダイレクトに感じることができる。

<開発の進んだ尾根> 八王子側だけでなく町田側も尾根沿いに多摩境通りがつくれ開発が進んでいる。そのため尾根の存在感はかなり薄れ、尾根緑道をまたいで八王子側と町田側で似通った世界が広がっているように感じられる。相原の七国峠越えの景観とはかなり対比的な姿である。

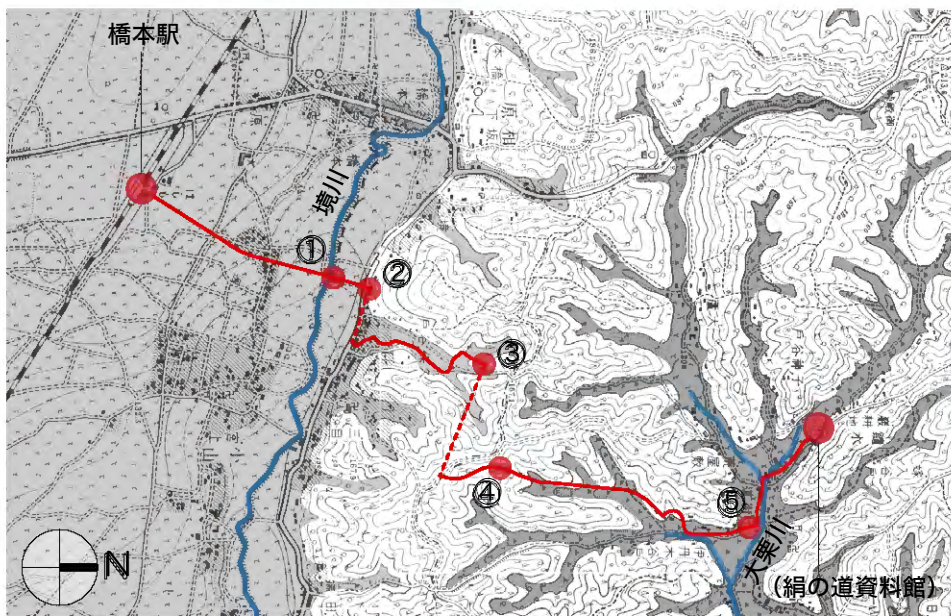
絹の道資料館



B：尾根緑道のトンネル越しに八王子側を望む。開けた向こうに鍾水の谷戸山が見える



C：尾根緑道のトンネルから町田側を望む。尾根際の高層マンションが視界を阻む



もしも明治42年に歩いたら…

0 0.5 1 2km



E：小泉屋敷。開発地を掻き取るかのように取り残された一画、S字の坂道と背景の森に挟まれて藁葺き屋根の小世界が広がっている

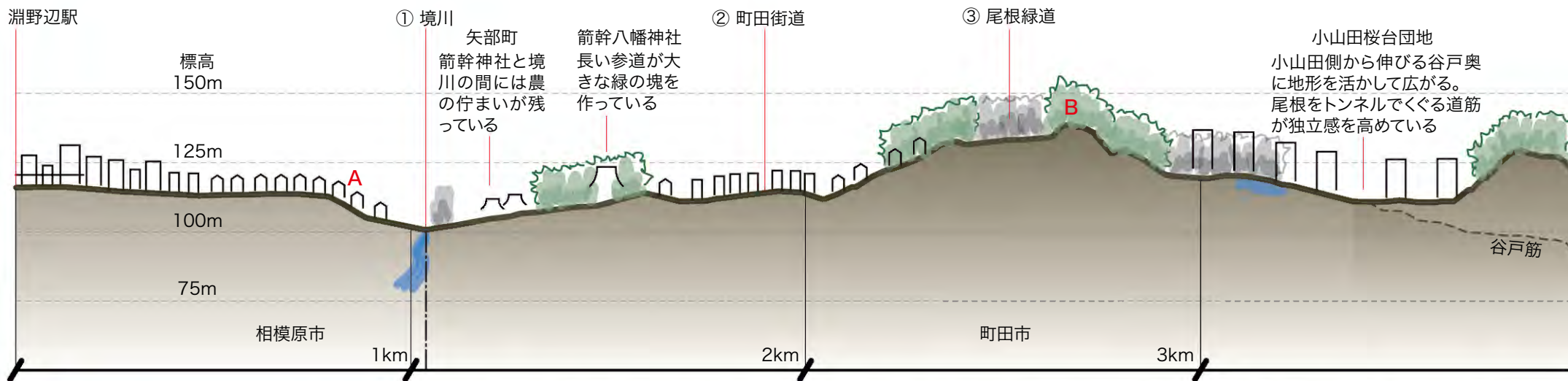


F：鍾水の谷戸。大栗川の北側は谷戸が開発の一手手前の姿で生き残っている。右手の道沿いに見えるのは絹の道資料館の石塀

わがり3 〈淵野辺ー小山田ー唐木田〉

歩行距離：およそ7.9km

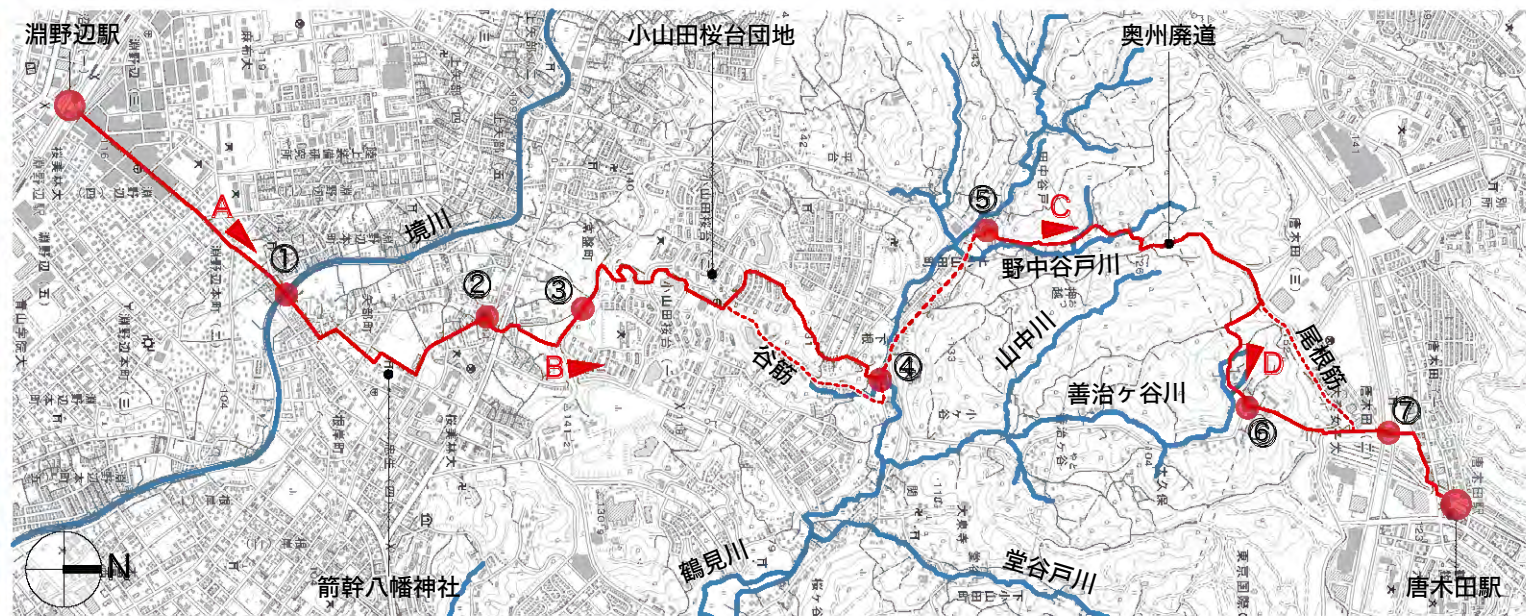
このエリアから稜線の北側も町田市域となり景観も多様さを増す。稜線たる尾根緑道を初め、境川沿いの矢部の農の風景、尾根に隔てられて奥深い佇まいをみせる小山田、などを通り淵野辺駅と唐木田駅を結ぶこのルートは、相模原台地や多摩ニュータウンも含め、さまざまな景観が隣り合う様子を体感できる。



A：相模原から町田を見る。正面に見える箭幹八幡神社の杜が通りの景観を印象づけている



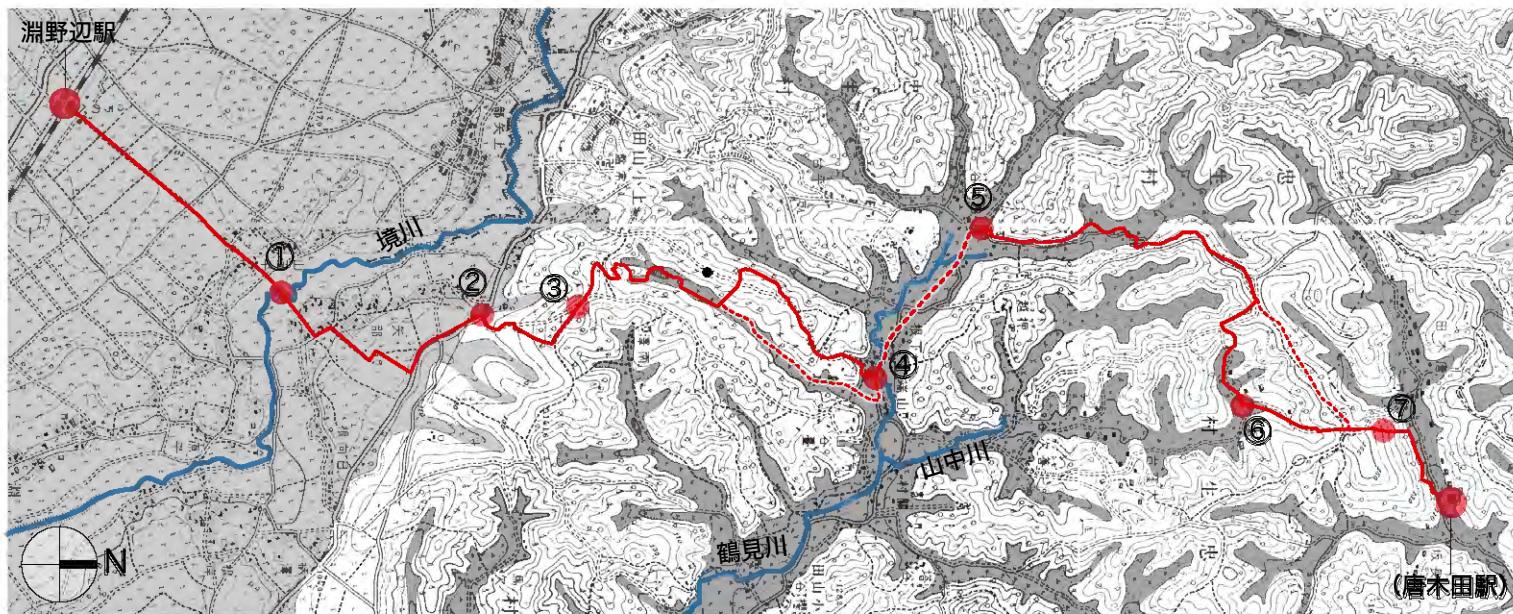
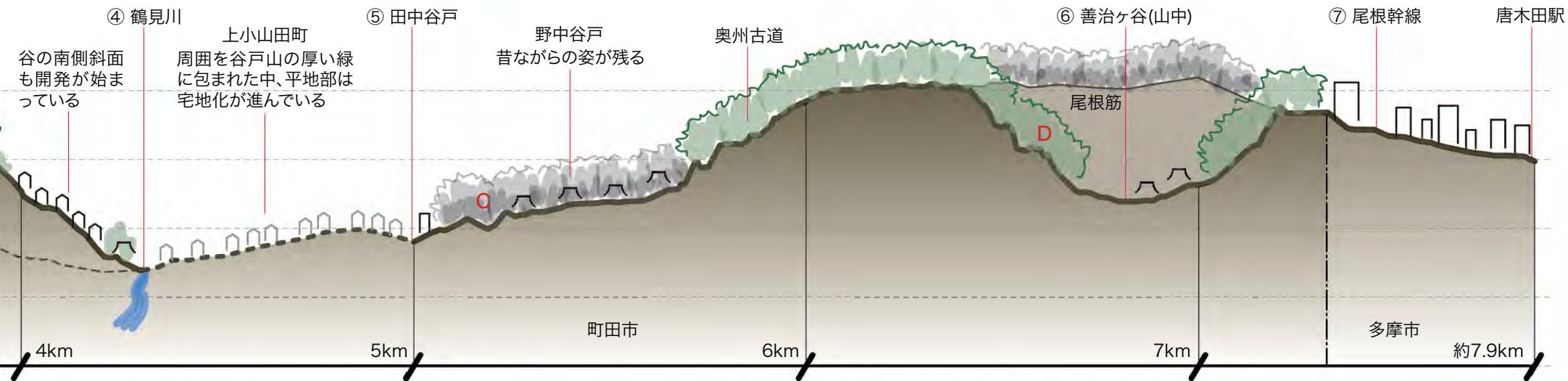
B：尾根緑道から小山田桜台団地を見る。住棟群越しに北部丘陵の尾根の連続を見渡せる



わがり3 マップ

<尾根緑道> この地域では緑道の両側とも町田市域となり、南側の台地上の風景と北側の北部丘陵の対比を幅広の緑道から見渡せ興味深い。小山田地域が奥にある感じがするのは、単に北部丘陵の中というだけでなく、台地から立ち上がる緑道の尾根で厚く区切られていることも影響しているように思われる。

<谷戸の原風景 > 北部丘陵では谷戸本来の姿の中を今も歩くことができる。多摩丘陵の谷戸はときに折れ曲がり分岐しながら細長く丘陵の奥へ分け入っていくが、点在する建物と相まって奥行きのある、あるいは独立性の高い景観を作り出している。市街化が進んでもこの特性は潜在的に残っているはずである。



もしも明治42年に歩いたら…



C: 野中谷戸の中景。山裾の道沿いに千鳥に連なる家々が谷戸の奥行きを感じさせる

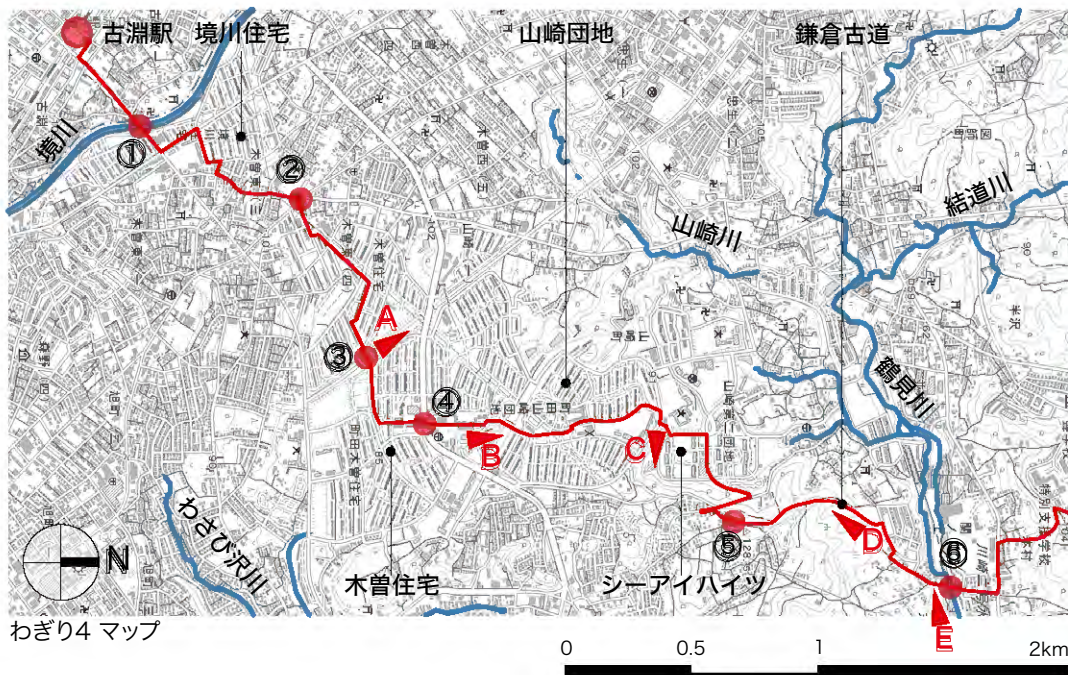
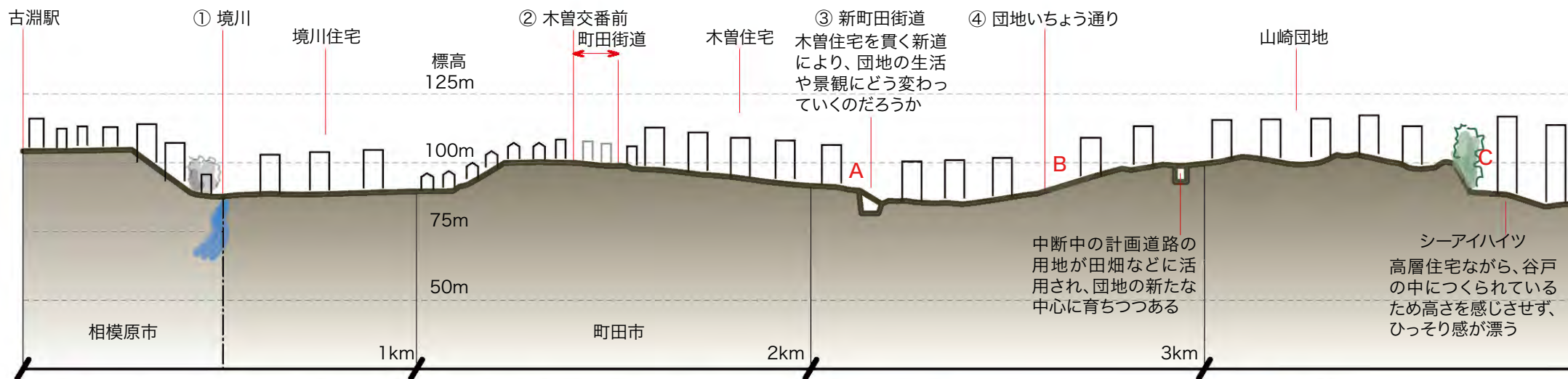


D: 善治ヶ谷山中地区。谷戸が折れ曲がっているため、閉じた盆地状の景観となっている

わぎり4 〈古淵—山崎—小野路〉

歩行距離：およそ9.1km

町田市で最も巾のあるエリアを古淵駅と尾根幹線を結んでわぎる長距離ルート。市域のうちこのエリアだけ台地と丘陵地帯の境が不明瞭という特徴を持つ。そのなだらかな凹凸の上に広がる大規模団地群と、起伏が大きく歴史や自然の豊かな北部丘陵を一気に貫く体験は、それぞれの違いをより明確に感じさせる。



B：山崎団地。高台に広がる住棟群は開放感があり、独特の雰囲気を持った景観を生みだしている



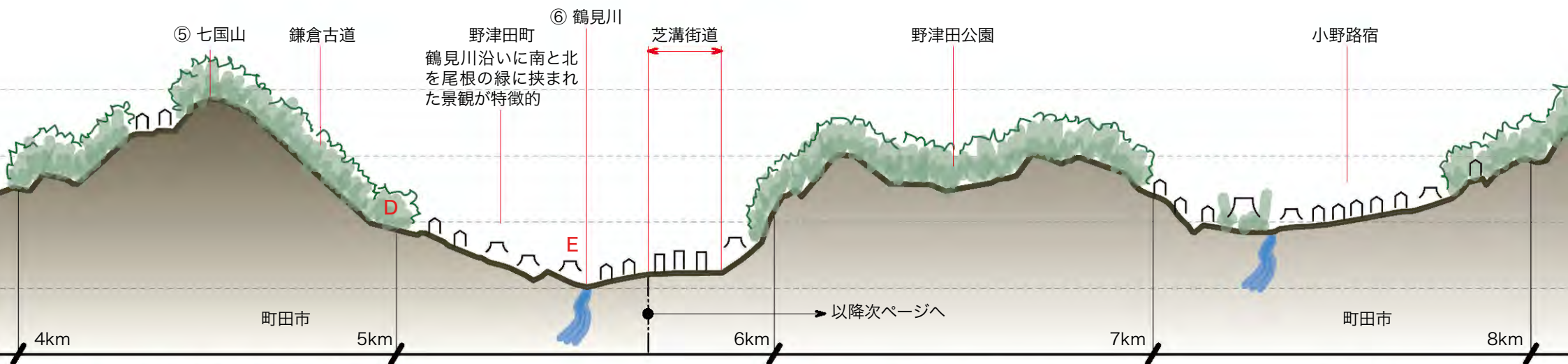
C：谷戸山の緑に埋もれるシーアイハイツ



A：新町田街道から見た木曾住宅

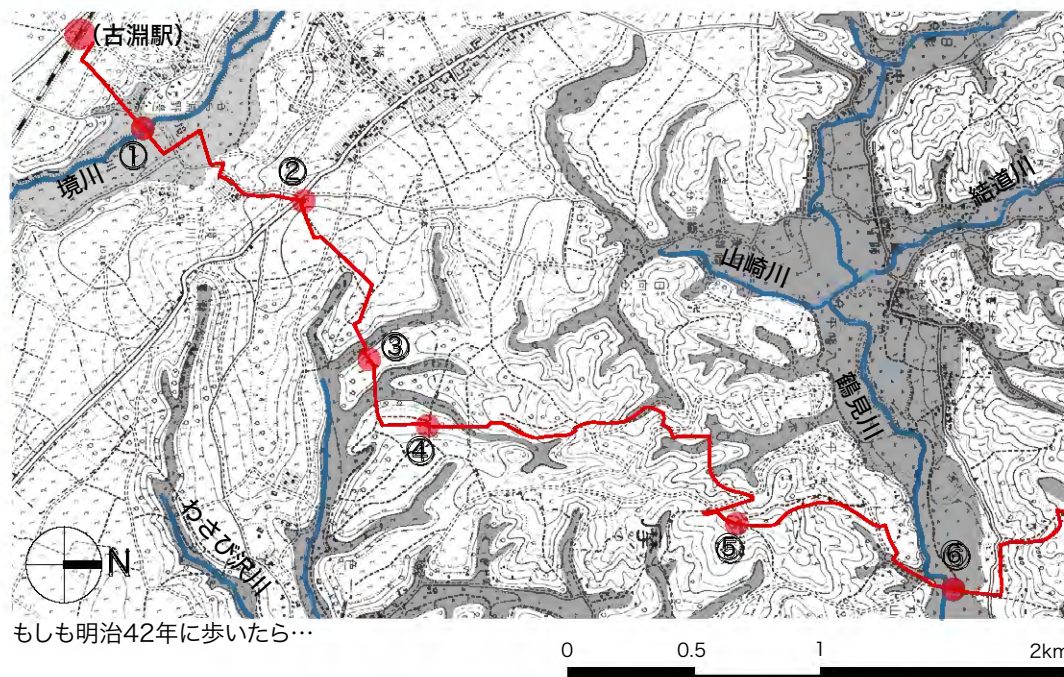
<山崎団地> 昭和40年代から10年ほどの間に建設されたこの巨大団地は、地形に合わせて内外とも曲線状に作られた道路に沿って建物が配置されている。そのため周辺の丘陵地から風が通り抜けやすいなど、地形が生む微気候が生活風景に四季ごとの変化をもたらしている。

<七国山> 団地に隣接する七国山からは多摩丘陵らしい起伏が続く。北斜面に鎌倉古道が残り、山頂近くの新井戸とともに往時の面影を感じさせるが、今井谷戸方面は斜面地の宅地開発が進んだため、尾根筋の緑が減少し始めている。



E: 野津田の鶴見川。ゆとりを持って整備された流れが緩やかな風景をつくりだしている。4月後半には市民により「鶴見川鯉のぼり川渡し」が行われる

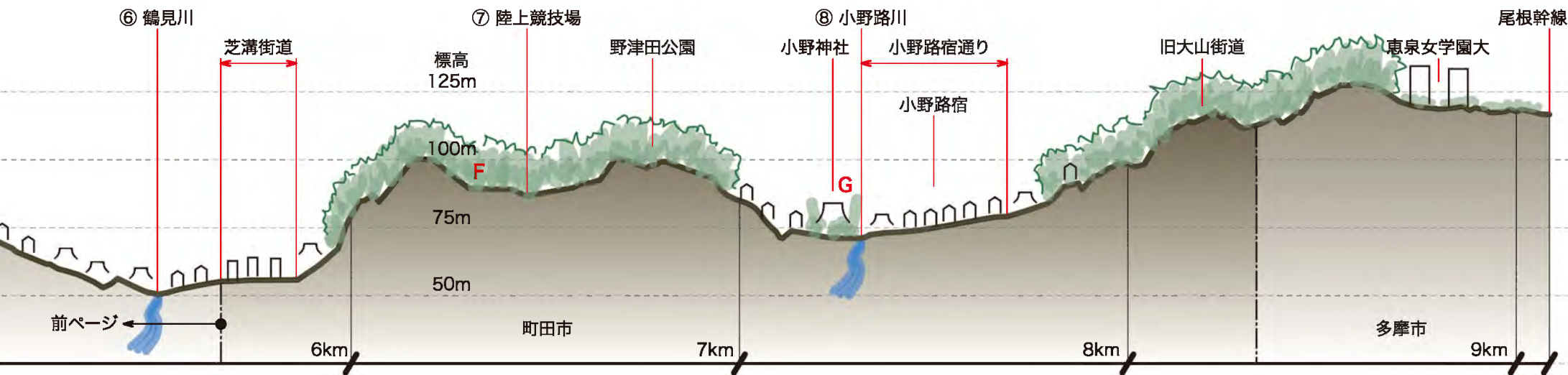
D: 七国山の鎌倉古道(上の道)。厚い緑地に包まれ深淵さが漂う



もしも明治42年に歩いたら...

<野津田の谷戸山の役割> 野津田と小野路の間に位置する谷戸山には、山の地形を利用して整備された公園がある。公園の厚い緑は、周辺と連なりながら鶴見川沿いの景観の背景となる一方、川を挟んだ向かい側の七国山の緑へも続き、地域の自然景観に深みをもたらしている。

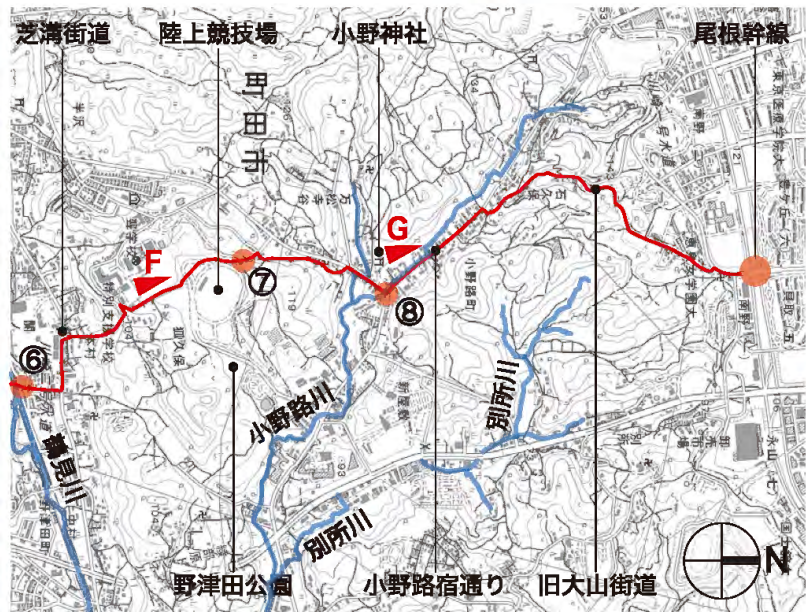
<小野路宿> 尾根幹線から旧大山街道をたどり小野路の峠を越え、下ると小野路宿に入る。この宿は江戸時代大山街道の宿場町として栄えた。当時の水路や板塀などは道路拡幅により改修されたが、小野神社から小野路の通りを俯瞰すると、連なる家並の向こうに古道を含む谷戸山が背景として見え、当時の面影を彷彿とさせる。



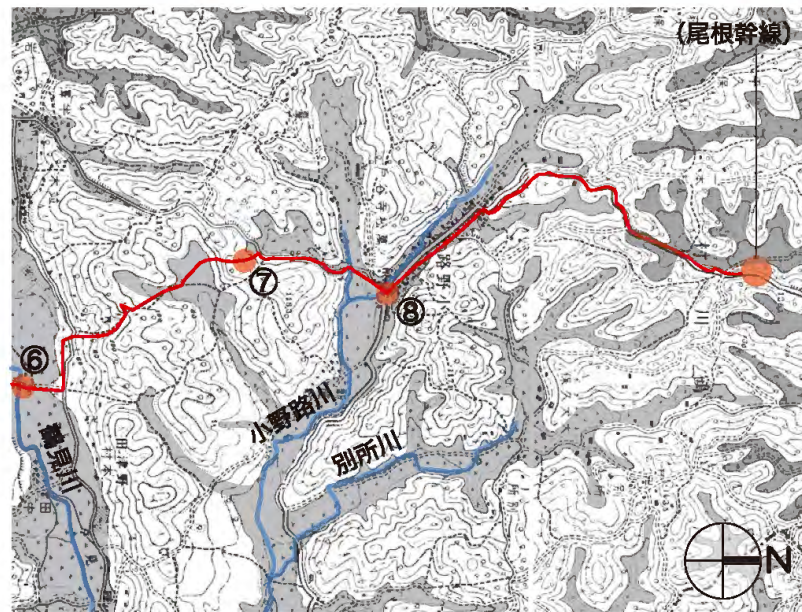
F：陸上競技場の巨大な観覧席は木々に埋もれ外部への威圧感は薄い



G：小野神社より小野路宿を臨む。谷戸山に包まれた屋根の連なり



わぎり4 マップ



もしも明治42年に歩いたら…

原型を伝える中景

小山田善次谷戸の最も奥にある山中地区。谷戸山の緑が中景の背景として農の風景を囲んでいる



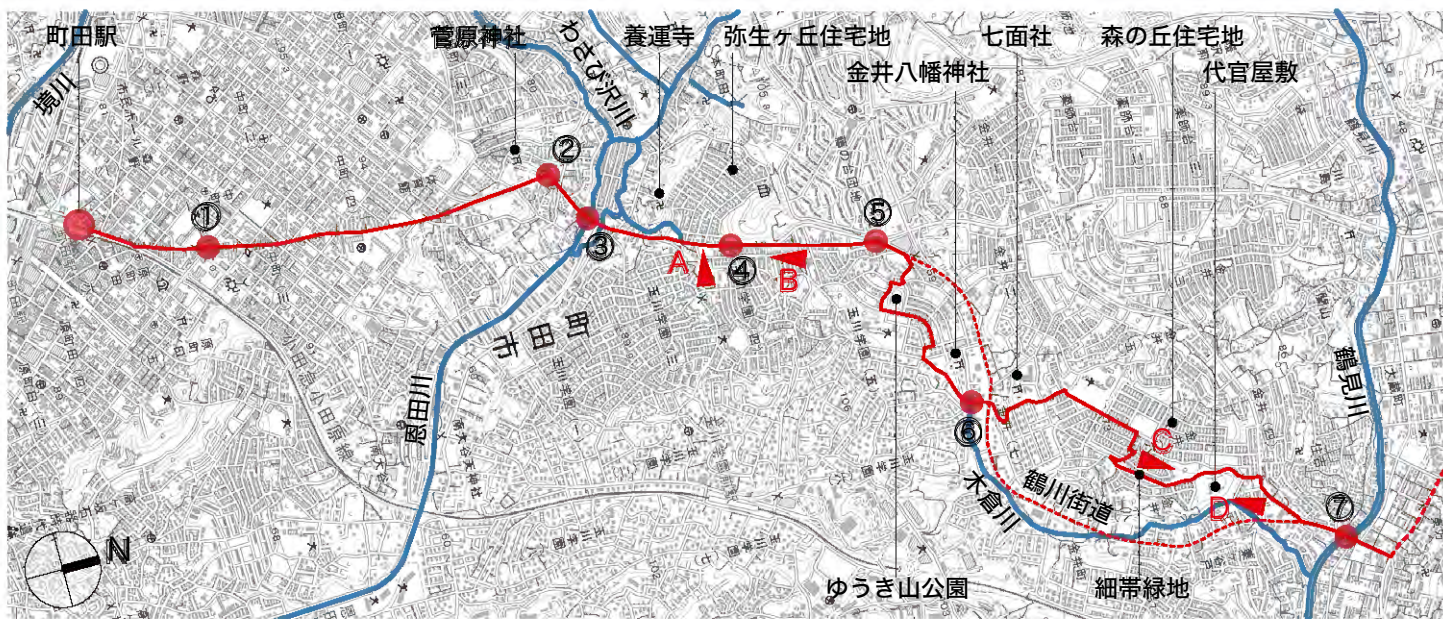
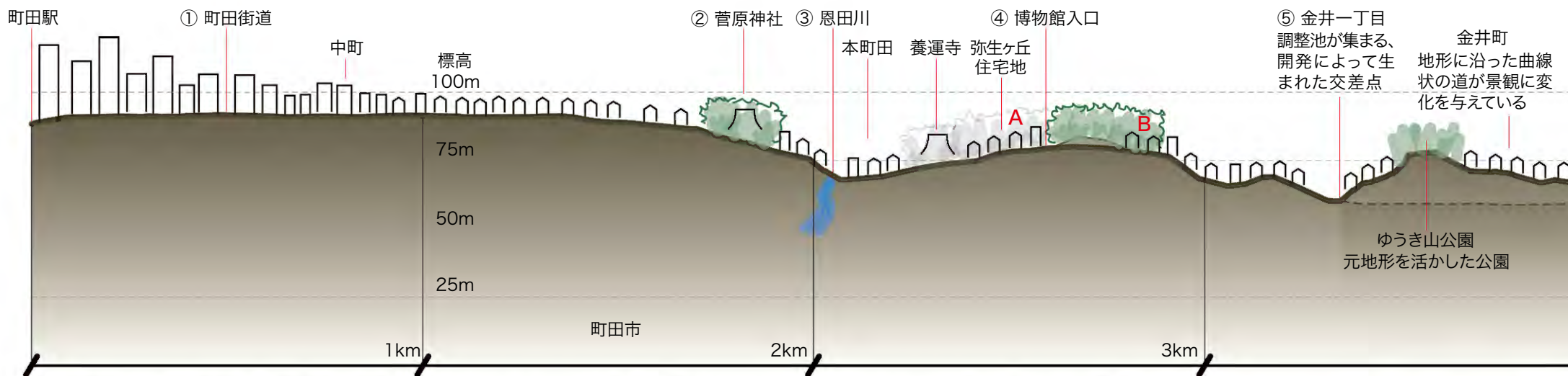
拡幅の済んだ小野路宿通り。谷戸山の間埋まる小野路宿では、沿道景観だけでなく、周りを包む尾根の緑を背景にした中景が宿らしさを生み出している



わがり5 〈町田-金井-新百合ヶ丘〉

歩行距離：およそ14.5km

町田駅から丘陵内を奥深く新百合ヶ丘駅まで、いくつもの尾根や谷を続けざまに越え渡る、わがり感覚満載のルート。その前半、芝溝街道までは、街道筋を伝いながら左右の住宅地に分け入り、地形と生活の間で見出されてきた道筋や宅地化によって変化した谷戸山の今を、昔の姿に思いを馳せながら歩いた。



わがり5 マップ



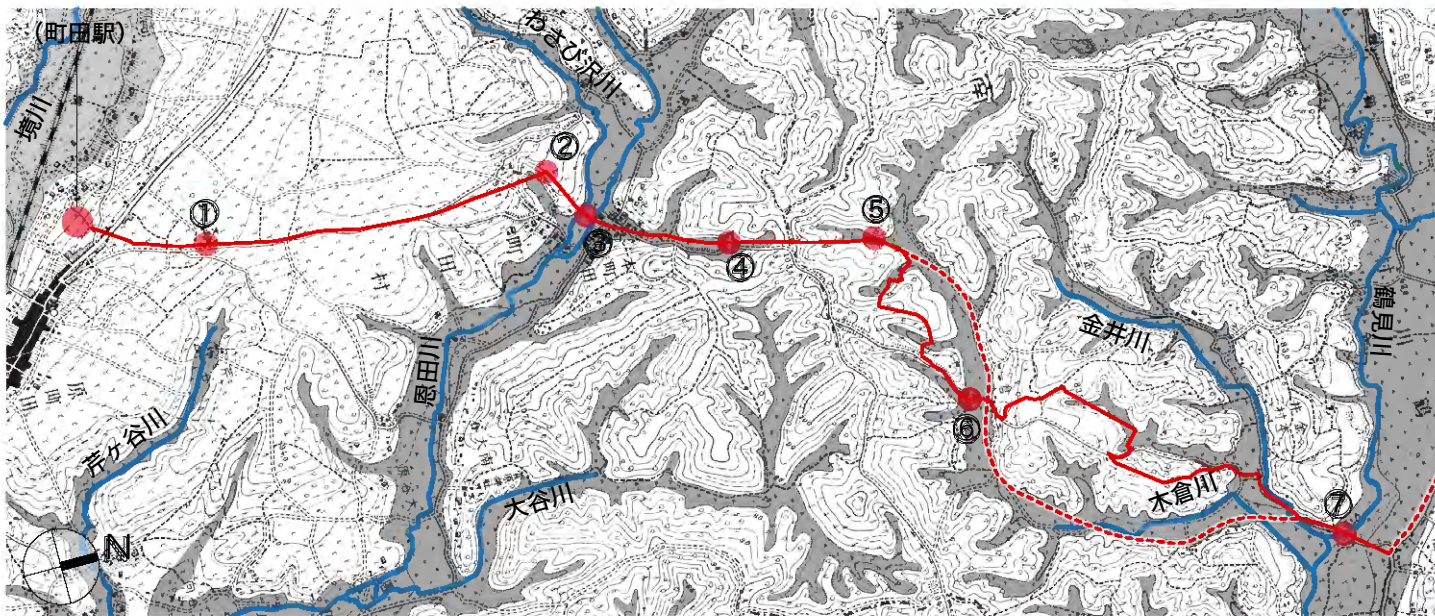
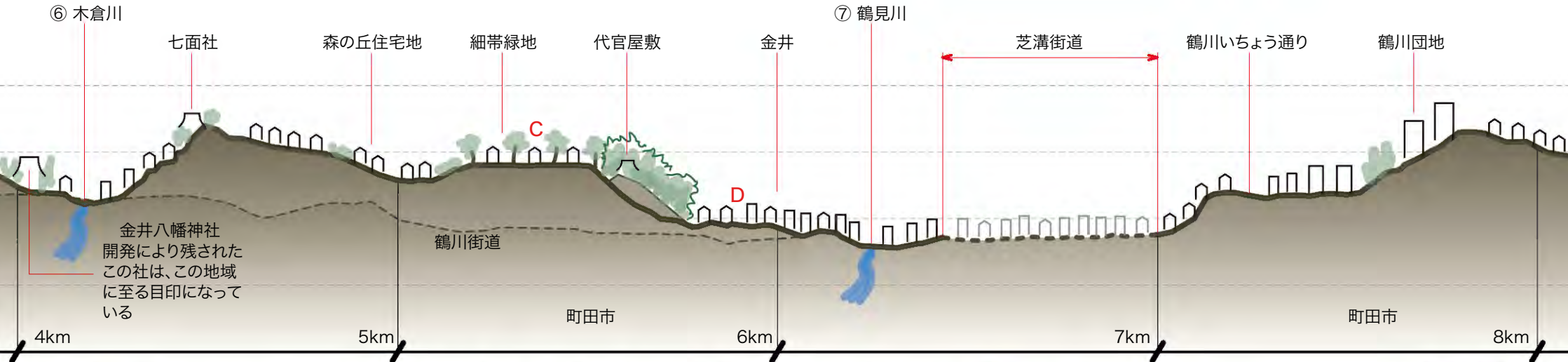
A：養運寺の緑は、弥生ヶ丘住宅地の背景として、住宅地の環境向上と周辺とのつながりに寄与している



B：金井から本町田への尾根越えは、昔の道筋が擁壁と自然な斜面が向き合う切通しになっていた

<開発住宅地の緑> 開発地を包むように緑地が計画された住宅地は、緑に守られている一体感が感じられる。一方、背中合わせの住宅地の間を埋めるように整備された緑地は、単に各々の領域を守る壁のように感じられる。開発時の緑の扱い方の違いは、景観の感じ方にまで影響を及ぼしてしまうようだ。

<尾根に残った細帯状の緑地帯> 代官屋敷につづく緑地は、両側の山腹が開発されて馬の背状になった尾根に一系列の樹木が細く帯状に残され、両側の住宅地の景観はそのわずかな緑地帯に頼っている。開発地の景観の背景として緑はどうあるべきか、改めて考えるきっかけとなった。



もしも明治42年に歩いたら…



C：森の丘住宅地の東は代官屋敷から尾根沿いに一系列の樹列が続くが、境の緑としてはもっと厚みがあるとより良い



D：代官屋敷の森は谷戸山の先端を伝えるだけでなく、カラフルな住宅群の背景として景観を支えている